



あゆな通信

茨城県立土浦第二高等学校

平成26年6月27日（金）発行

校長 飯塚 弘之

土浦二高生へ

2003年のPISA（OECD）が実施した高校生の学習到達度調査の結果以来、日本の高校生の学力低下とゆとり教育についてや、分数の計算のできない大学生など、高校生・大学生の学力低下が問題になった。その後、小学校から大学まであらゆる段階で学力を低下させないための取組が行われている。土曜課外や土曜授業を実施している小学校・中学校・高校も増え、2012年のPISA（OECD）の結果は良くなっている。

学習時間の減少＝学力の低下とは必ずしも言えないが、1日の学習時間が1,2時間では高校の難しい内容において、得意教科のレベルアップや不得意教科を克服することなど難しいのが現実である。そのような中で、理解できなくなった教科を受験科目として使わなくなり、受験科目の減少と同時に自分の可能性を絞っているのではないだろうか。

高校から大学への入試制度は生徒を文系・理系に分けるが、その際、国語が出来ないから理系、数学が出来ないから文系などと決めていないだろうか。現在は、文理融合の時代であり、技術を人間生活に結びつけるには感性に礎をおいたアイデアが必要であり、生まれたアイデアをものにしていくには最新の情報機器を操れることは必要である。最先端の研究室から実際に人と接する営業に至るまで、この傾向は強くなっている。

そもそも文系・理系の区別とは何であろうか。数学を苦手とする人たちが文系で、得意とする人たちが理系なのであるか。現実的に見てそういう面がないではないが、それは文理の区別を正しく認識しないで進学してしまったことに起因するのではないだろうか。文系の人たちは、「ジェネラリスト」と呼ばれる人たちだ。あらゆる分野の知識を持ち感性豊かな集団。いわゆるオールマイティーな集団である。理系の人たちは、「スペシャリスト」と呼ばれる人たちだ。一つの分野に対して他の追随を許さない深い知識と経験を持つ集団。いわゆるエンジニアの集団である。それが数学の出来不出来で自分を識別してしまい、学問に対する情熱も失せ、「幅の狭いジェネラリスト」「底の浅いスペシャリスト」では情けない。数学を含め、今学習している教科は極言すれば単なる道具である。道具とは使いこなすべきものであり、決して振り回されてはいけない。そのことを念頭に置いて受験勉強に取り組んで欲しい。

文系・理系というのは区別を言うのではない。それは、その人の持つ沢山の可能性に対する一つの選択にすぎない。今の国際社会・情報化社会の要求に応じていくことは大変なことだが、それだけやり甲斐もある。

本校の生徒の皆さんには、将来、素晴らしい「ジェネラリスト」「スペシャリスト」になるために、本校での生活が有意義な3年間になることを願っている。

※ 平成27年度から全員参加の土曜課外実施

現在までも、希望者への土曜課外は実施していましたが、平成27年4月から全生徒参加、月2回の土曜課外を実施します。

あゆな祭

6月6日・7日の本校「あゆな祭」には、雨天にもかかわらず2,300人の方々にご来校いただき、ありがとうございました。

各文化部・各クラスの発表など、二高生の頑張っている様子を見ていただけたかと思います。地元の方々・保護者の方々だけでなく、多くの中学生にも来ていただきました。ぜひ、二高に入学し、私たちと力を合わせ、さらにすばらしい「あゆな祭」にしていきたいと思います。入学待っています。文化祭実行委員一同

【あゆな祭ゲート】



【今年度ポスター】



【PTAによるバザー】



【書道部発表】



【茶道部】



【箏曲部】



【合唱部】



【吹奏楽部】



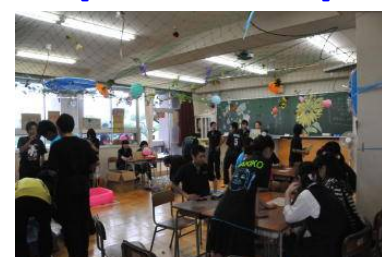
【焼きそば】



【創作舞踊部】



【ゲームコーナー】



貴重な体験

1年 藤田 唯花（豊里中出身）

私は今年、有志実行委員として、第34回あゆな祭の準備をお手伝いしました。その中で最も印象に残っているのはアーチ作りです。今年のデザインは、あゆな祭のテーマとなったPreludeの文字の周りに様々な形の音符が、また、アーチの脚となる部分には二人の天使が描かれていました。最初は、手伝う時に失敗してしまったらどうしよう、と不安でいっぱいでしたが、あゆな祭の前日にアーチを大人数で運び校門に立てることが出来た時は、横倒しの状態で見えていた時よりも堂々と、立派に見えて感動しました。この感動は有志実行委員だったからこそ、味わうことができた気持ちだと思っています。

このような貴重な体験をすることができたので、私は有志実行委員として活動して本当に良かったと思っています。来年も機会があれば参加したいです。